



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	阿部, 剛史; 山田, 久恵
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 47
Issue Date	2024-01-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95634
Type	book
File Information	MuseumNews_47.pdf





CONTENTS

- 01 夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景」
- 02 全国博物館等協議会開催
- 03 プレスリリース
- 09 学生企画ワークショップ「おえかきミュージアム」を開催
- 13 「北海道大学総合博物館がやってきた！
JRタワー・エゾミュージアム」開催

夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景－」開催

●2023年7月22日～9月10日



札幌農学校附属農場の紹介



小岩井農場の紹介

7月22日から9月10日まで夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景－」(主催:北海道大学総合博物館・工学研究院建築デザイン学研究室、共催:小岩井農場財団)が開催された。

本展覧会を企画した背景には、近代農場施設に焦点をあてることで、2026年に創立150年を迎える本学の歴史の一端を振り返ることができるのではないかと意図があった。また、本学キャンパスを保全する上で第二農場をはじめとする本学の歴史的遺産の活用について考える契機にすることも企図した。しかし、本学の歴史だけでは、北海道、あるいは日本の農業近代化に果たした農学校の役割は理解できない。よって、民間農場として1891年に開場した小岩井農場の歴史を、本学と同じく重要文化財に指定されている21棟を中心に紹介し、共通点と相違点

の整理を試みた。

本展覧会では会場を8つのゾーンに区分し、日本における官民の近代農場の諸相、本学第二農場と小岩井農場の重要文化財施設の紹介にはじまり、札幌や北海道の開拓や市街化と強くむすびついた8つの附属農場の変遷とキャンパスの形成、荒野を開拓して農場を中心とした“まち”に発展させた小岩井農場の歴史、官民2つの農場を創設から農地開放までのできごとを追った年表、近代農業の発展を担った人々の相関にみる近代農業の発展に至る内容を46枚のスクリーンパネルと6つの建築模型、農場風景の映像で展示した。展示を一見し、多くの類似点があることには企画者としても驚いた。

展示の締めくくりを人物相関図にしたのは、真駒内牧牛場の開設を主導し、札幌農学校でも指導したE・ダンのようなお雇い外国人はもちろん、彼らに指導を受けた佐藤昌介や南鷹次郎など草創期の学生、そして教育者となった彼らに指導された後身が媒介となって近代農業技術が伝播したと考えたからである。たとえば、全国各地に点在した官民の農場で指導したことが知られる南は、内地への出張や学生を伴う修学旅行で小岩井農場を訪れ指導している。

また、第二農場の模範家畜坊、種牛舎、穀物庫と小岩井農場の四階倉庫、種牡牛舎の大きさは

1:30で統一し、一方は建物の外観を、もう一方は架構や内部をのぞけるように壁をつけずに断面を表現した。パネルには可能な限り写真や図面をレイアウトしたが、これらの模型を通じて構造や材料、寸法などの共通点と相似点を擬似体験できたのではないかと考えている。もちろん、会場から徒歩圏内にある第二農場へ向かえば実体験できるから、これらも展示物の一部と位置づけた。さらに展覧会では内容を紹介する冊子を作成するのが一般的であるが、本企画展ではパネルや映像では伝えきれなかった内容の深化を目的に“副読本”を編集し、ミュージアムショップで有償頒布した。

こうした全体の調整や会場レイアウトの検討、農場での実測調査と模型4基の作成を建築デザイン学研究室が、スクリーンパネルと頒布資料、模型1基を名古屋市立大学角研究室が担当した。また、両大学の学生が協力して会場を設営した。このように企画から運営の中心が学生であったことを強調しておきたい。

ところで、理学部創設にあたり、七飯町の第七農場を払い下げて建設費の一部として1929年に竣工した歴史的建造物が総合博物館である。この会場も附属農場の歴史を伝えている。

ちなみに、スクリーンパネルと模型の一部は、小岩井農場重要文化財ギャラリーの企画展として巡回展示された。

角 哲

(工学研究院准教授・7月末まで名古屋市立大学大学院准教授)



札幌農学校第二農場の模範家畜房(左)と穀物庫(右)の模型

第26回大学博物館等協議会・第18回日本博物科学会の開催

●2023年6月22日～23日



1日目 大学博物館等協議会 シンポジウム(パネルディスカッション)



1日目 日本博物科学会 ポスター発表

2日目 日本博物科学会
研究・口頭発表(藤田正一 元総合博物館館長による冒頭挨拶)

大学博物館等協議会は、大学附置の博物館や設置準備委員会、国立博物館等で創設された団体です。2023年10月現在、全国の44団体が加盟しています。その第26回大会および第18回日本博物科学会が本学学術交流会館で開催されました。坪田敏男館長以下、当館スタッフは総出で大会運営にあたりました。本大会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で3大会ぶりの対面開催でした。

大会初日は大会実行委員長の坪田館長、次いで山本文彦理事の挨拶で始まりました。その後の「大学博物館におけるボランティア活動の現状と課題」と題したシンポジウムでは、坪田館長による趣旨説明の後、広島大学総合博物館の清水則雄先生、名古屋大学博物館の梅村綾子先生、東京大学総合研究博物館の佐々木猛智先生、そして当館の湯浅万紀子先生に各館のボランティア活動についてご講演いただきました。一口に「大学博物館のボランティア活動」と言ってもその活動は館によって大きく異なります。講演後に実施したパネル・ディスカッションも含め、それぞれの館における取組だけでなく、その背景にある経緯や意図の異同など、様々な観点で情報交換の場となりました。

大会2日目は藤田正一総合博物館元館長の

挨拶で幕を開けました。藤田先生は日本博物科学会の発起人です。その第1回大会はちょうど18年前(2006年)の6月22・23日に今大会と同じ学術交流会館で開催されました。学会発足に向けて藤田先生が第8回大学博物館等協議会で発表された呼びかけは、現在も大学博物館等協議会のホームページで見ることができます(<http://univ-museum.jp/index.html>)。各館から研究発表を募るとともに、各館の紹介ポスターを展示する現在の日本博物科学会のスタイルは、第1回開催時に藤田先生が呼びかけられたものが継続されていることを今回初めて知りました。口頭発表は教育、研究、地域と社会連携、マネジメント、展示の5つのセッションからなる13件、ポスター発表は6件を数えました。各発表の後には活発な質疑応答がなされ、発表者・参加者ともに実りのあるものになっていたように見受けられました。

2日目午後の特別見学会・ガイドツアーは、北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館と総合博物館の2手に分かれて実施しました。植物園博物館のツアーでは、同館の加藤克先生に解説いただき、北海道開拓初期に収集された貴重な標本や資料群を見学する機会に恵まれました。総合博物館のツアーは、参加者を4

班に分けて館内を一筆書きで回るルートで実施しました。各エリアでご対応いただいた先生方には都合4回の解説をお願いすることになってしまいましたが、当館教員による展示解説や、普段は立ち入れない他分野の収蔵庫の見学は、大学博物館関係者である参加者の皆さんにとっても何か新しい発見があったのではないかと思います。

コロナ禍のここ数年、学会大会はオンライン開催が当たり前になっていました。大会運営の観点からみると、会場などの準備が不要となるため、オンライン開催は対面開催に比べて負担が少ないという利点があります。しかし、関連分野の研究者が一堂に会する空気感や、ちょっとした雑談から生まれる新たな研究の契機など、対面開催の良さを再確認することができました。また、函館キャンパス水産科学館の田城文人先生も含む、まさにスタッフ総出の大会運営は、スタッフ間の絆を強めるうえでも格好の機会となりました。

江田真毅

(研究部教授/動物考古学)

プレスリリース

日本最古のニワトリの雛を発見 ～弥生文化におけるニワトリ飼育の解明へ～



写真1. セキショクヤケイ(中央手前および右)とニワトリ(中央左が雛、右が雛)(マレーシア・クアラルンプールにて)

ニワトリは南極大陸を除くすべての大陸とパチカン市国を除くすべての国で飼育されている人類に最も身近な生物の1つです。ニワトリの主たる祖先は、東南アジアの森林に生息するセキショクヤケイ。この鳥は体重1kg弱で年間4～8個の卵を産む鳥です。現代のニワトリと比べると小型で、肉量も産卵数も極端に少ないと言えます



写真2. 唐古・鍵遺跡からみつかったニワトリの雛の骨(1:大腿骨、2:寛骨)(田原本町教育委員会蔵)

す。最初期のニワトリはセキショクヤケイと同程度の体重と産卵数であったと考えられます。ニワトリの飼育は約3500年前ごろに東南アジアで始まったと考えられています。そして、日本列島には弥生時代に導入されたことが知られています。しかし、弥生文化の遺跡からみつかったニワトリの可能性のある骨は7遺跡から20点程度と希少です。そのため、骨の直接的な年代測定は実施された例がなく、詳細な日本列島への渡来年代は明らかになっていませんでした。

ニワトリの形態の性差に着目した研究では、弥生文化の遺跡から出土するニワトリはほとんどが雄と推定されています。このことから、当時のニワトリは日本列島ではほとんど繁殖させることができない、生きた朝鮮半島や中国大陆との関係性の証であった可能性が考えられてきました。唐古・鍵遺跡の第58次調査では、弥生中期初頭と推定される溝から、明らかなニワトリの骨とキジ科の雛の骨が4点見つかりました。このニワトリの骨は、現在日本列島で最も古いニワトリの骨と考えられているものです。また、雛の骨もニワトリのものの可能性が考えられましたが、形態的特徴からはニワトリのもののかどうかは特定できませんでした。

そこで私たちは、唐古・鍵遺跡で見つかったキジ科の雛の骨2点を対象に、コラーゲンタンパ

クの質量分析による骨の種同定を実施しました。この方法は私たちが2020年に確立・発表した方法で、日本に生息する中型のキジ科の野鳥(キジとヤマドリ)とニワトリの識別が可能です。また、ニワトリと同定された雛の骨のうち1点について、放射性炭素年代測定による実年代の特定を実施しました。

質量分析の結果、キジ科の雛の骨2点のスペクトラムでは、いずれもニワトリに特徴的なピークが確認され、ニワトリと同定されました。また放射性炭素年代測定の結果、雛の骨は弥生中期初頭に相当する紀元前4世紀～同3世紀のものであり、混入した新しい時代の骨ではないことが確認されました。これらの結果から、少なくとも唐古・鍵遺跡では弥生中期初頭からニワトリが継代飼育されていたと推定されました。

今回分析した資料がみつかった唐古・鍵遺跡は日本列島の弥生文化における最大規模の集落遺跡です。そのため、今回の結果は日本列島の弥生文化の集落でニワトリが広く継代飼育されていたとみなせるものではありません。ニワトリは唐古・鍵遺跡のような最大規模の拠点集落でのみ継代飼育できるものであった可能性があります。今後、本研究で有効性が確認されたコラーゲンタンパクの質量分析を用いたキジ科の骨の同定が進められることで、弥生文化におけるニワトリ飼育の様相がより詳細に明らかになると期待されます。

なお、本研究成果は、2023年4月20日(木)、オンライン公開のFrontiers in Earth Science誌に掲載されました。

江田真毅
(研究部教授／動物考古学)

書誌情報：
◎論文名
The earliest evidence of domestic chickens in the Japanese Archipelago
◎著者名
江田真毅¹、泉 洋江¹、米田 稯²、藤田三郎³
(¹北海道大学総合博物館、²東京大学総合研究博物館、³田原本町教育委員会)
◎雑誌名
Frontiers in Earth Science
◎DOI
10.3389/feart.2023.1104535

プレスリリース

北海道の首の短い大型首長竜：プリオサウルス類化石

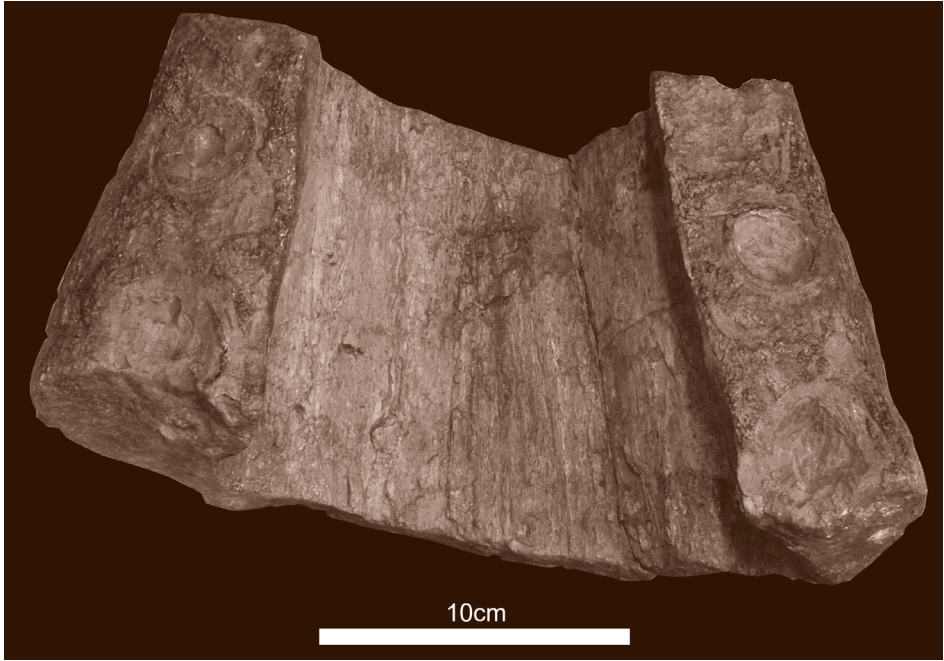


図1：プリオサウルス類化石(羽幌標本)の上顎の一部(腹側から見た写真)

北海道内4か所から発見された首長竜プリオサウルス科の化石の研究が、神奈川大学の佐藤たまき教授や北海道大学総合博物館の越前谷宏紀資料部研究員らの研究グループにより進められ、2023年6月15日に学術誌Cretaceous Researchで論文が公表されました。

首長竜は恐竜が生きていた中生代の海棲爬虫類で、白亜紀後期には3つの系統が認められています。このうち首の長いエラスモサウルス科と小型で首の短いポリコティルス科は白亜紀末まで生息したことが知られていますが、大型で首の短いプリオサウルス科は白亜紀後期の中頃に絶滅したと考えられています。

プリオサウルス科は短い首や巨大な頭蓋骨と歯が特徴的な首長竜のグループで、ジュラ紀後期や白亜紀前期には体長が10m以上に達するものもいたことが知られています。おそらくジュラ紀や白亜紀の海の頂点捕食者であったにもかかわらず、プリオサウルス科の絶滅については、

あまり研究が進んでいません。

今回研究された4標本のうち北海道大学総合博物館が所蔵する羽幌標本は、2000年に砂川市の山中重利さんが羽幌町上羽幌で発見し北海道大学が採集したもので、頭蓋骨、椎骨、肋骨、骨盤などを含み、4標本のうち最も保存部位が多い標本です。

私たちの研究によると、羽幌標本の頭蓋骨全体の最大長は約1.7m前後と推定されます。これは、北米のほぼ同年代の地層から見つかった大型種メガケファロサウルス・エウレルティの大型個体に匹敵します。メガケファロサウルスの化石は頭蓋骨以外の部位が見つかっていません。しかし、より小型のプリオサウルス類の椎骨と比べて1.5倍から2倍の大きさの椎骨を持つことから、羽幌標本は当時のプリオサウルス科としては非常に大きな個体であったことが分かります。なお、メガケファロサウルスと羽幌標本が別属または別種であるかどうかは、残念ながら不明です。しかし、多くの北米産のプリオサウルス科の

歯に見られる、歯冠のすじが枝分かれするという特徴は、羽幌標本を含む日本産の標本やヨーロッパ産の標本では今のところ確認されていません。

羽幌標本と一緒に見つかったアンモナイトとイノセラムスの年代分布から、羽幌標本の年代はチューロニアン期後期という時代であると分かりました。チューロニアン期の1つ前の時代であるセノマニアン期とチューロニアン期の境界(約9,400万年前)は古くから生物相に大きな変化があった時期として認識されており、最近の研究では、世界各地で海洋無酸素事変に関連した海洋環境の大変化があったことが分かっています。海棲爬虫類の主要グループのうち、魚竜類はセノマニアン期に絶滅し、あたかもそれに取って代わるように、モササウルス亜科の多様化はセノマニアン期から次のチューロニアン期の間に起こりました。



図3：復元画／ポリコティルス類を襲うプリオサウルス類 ©新村龍也・足寄動物化石博物館

公表されている白亜紀後期のプリオサウルス類の化石記録は北半球のものに限られ、ほとんどがセノマニアン期のもので、チューロニアン期以降の化石は非常に少ないことから、プリオサウルス科は白亜紀末の大量絶滅を待たずに絶滅したと考えられています。羽幌標本の産出年代はチューロニアン期後期と特定でき、セノマニアン期末の海洋無酸素事変を越えて、プリオサウルス類が北西太平洋地域でチューロニアン期後期まで生存していたことが明らかになりました。

なお今年の博物館実習生の手により羽幌標本の展示が制作されました。総合博物館の3F「古生物標本の世界」展示室にて迫力ある本物の化石を是非ご覧ください。

越前谷宏紀
(資料部研究員)



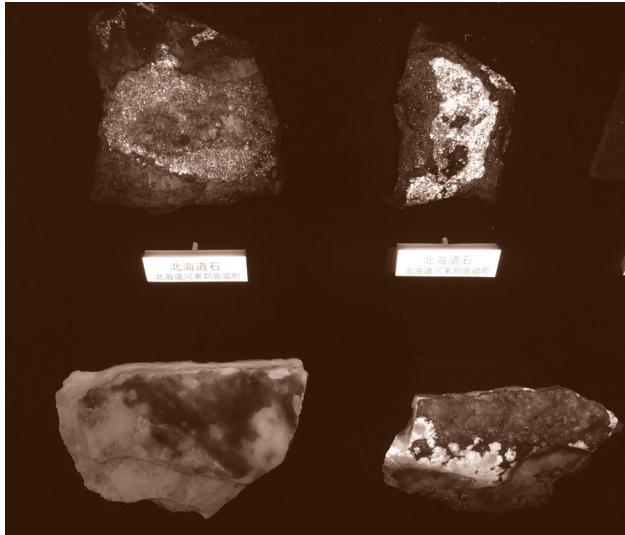
図2：プリオサウルス類化石(羽幌標本)の産出部位 ©新村龍也・足寄動物化石博物館

新鉱物「北海道石」期間限定展示

2023年1月に新鉱物に認定された北海道石（ほっかいどうせき）などを博物館3階展示室鉱物・岩石標本の世界にて、5月30日(火)～9月3日(日)の期間限定で展示しました。北海道石を発見および命名した研究グループから、北海道石および北海道石とともに産出したカルパチア石、ピチューメンを含むオパールを寄贈していただき、5月26日の研究グループによるプレスリリース後に当館での展示を開始しました。北海道石は世界的に産出が稀な有機鉱物の一種で、北海道河東郡鹿追町および上川郡愛別町で発見されました。紫外線を照射すると、黄色～黄緑色に美しく蛍光する特徴があります。カルパチア石も有機鉱物の一種で、鹿追町産のカルパチア石は紫外線を照射すると美しい黄色に蛍光します。鹿追町産のオパールはピチューメンという有機物を含むことで、紫外線でオパール全体が鮮やかな橙色に光り輝きます。鹿追町産の北海道石、カルパチア石、ピチューメンを含むオパールは、植物遺骸由来の有機化合物が火山活動に伴う熱または熱水で加熱・変質して形成されました。このような形成過程は一種の熱水性石油

の生成機構とみなすことができるため、北海道石は石油生成の謎を解く鍵となりうると考えられています。この展示では、北海道石、カルパチア石、ピチューメンを含むオパールの標本を展示するだけでなく、簡単な解説パネルに加えて研究グループが調査・研究するために得た特別な許可証の複製も展示し、各鉱物が紫外線照射時に蛍光する様子を映像で紹介しました。新鉱物北海道石の展示は、道内外から多くの方々に足を運んで観覧していただきました。さらに、NHK北海道、HBC北海道放送、北海道新聞の取材・撮影にも活用され、北海道石などの蛍光する

北海道石などが蛍光している様子



美しさだけでなく、北海道石の意義や特徴、そしてメルカリなどで売買されていた社会問題について広く発信しました。

北野一平
(研究部助教／岩石鉱物学)

THEインパクトランキング4年連続国内1位を称える盾の展示開始

イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE: ティー・エイチ・イー)」による「THEインパクトランキング」は、大学の社会貢献の取り組みを、国連のSDGsの枠組みを使って評価するというものです。このランキングで本学が4年連続国内1位を獲得したことを称える盾が授与され、当館1階「ロフティーアンビション

の系譜」にて公開されました。1876年に日本で最初の近代的大学として開校した札幌農学校を前身とする本学は、北海道の豊かな自然を背景に、農業・林業・水産業等に関するフィールド研究を強みとして推進してきました。「SDG2 飢餓をゼロに」「SDG6 安全な水とトイレを世界中に」「SDG9 産業と技術革新の基盤をつくろう」

「SDG14 海の豊かさを守ろう」「SDG15 陸の豊かさを守ろう」「SDG17 パートナースhipで目標を達成しよう」が世界100位以内にランクインし、高い評価を得ました。

阿部剛史
(研究部准教授／海業系統分類学)

授与された盾と
THEインパクトランキングのバナー



第4回建築の学生展 ―あなたの好きを聞かせてください―

●2023年9月30日～10月1日



自身の作品を解説する建築学生

工学部建築都市コースの学生有志が授業で制作した模型や図面を展示し、来場者に自分の提案を解説する企画展「建築の学生展」を9月30日、10月1日の2日間にかけて開催しました。2019年からスタートした本企画展は、今回で4回目となり、学部3年から修士1年までの17名の出展者に加え、学部2年の学生もプロジェクトチームに参加し、学年を越えた協働によりつくりあげた展示会となりました。2日間で合計656人の方にご来場いただき、来場者、参加学生の両者が楽しめる展示会になったと感じています。

今回の学生展のコンセプトは「好き」の2文字。好きなもの、好きな場所、好きな風景というように、「好き」という誰もがもっている思いを通して、建築の世界に触れていただき、自らの「好き」を見つめなおしていただくことを目指し、展示内容や構成を考えていきました。

このコンセプトのもと、第1会場では学生が作品の展示・解説を行うほか、第2会場では新たな試みとして来場者が展示をつくる主体となる「体験型展示」を行うという構成をとりました。

第1会場では、専門や年齢が様々な来場者に言葉を変えながら自らの提案を伝える面白さや難しさを感じながらも、参加学生は自分の「好き」や「こだわり」というものがどのように建築に

なっていくのかを、展示と対話を通じて表現しました。対話形式の展示は、参加学生にとって、普段の専門内での対話からは得られない、客観的に率直な意見を聞くことができる機会となり、再度自分たちの提案を見つめなおすきっかけとなりました。

また第2会場の体験型展示では、学生の作品写真から、来場者が「好き」と感じたものを選びその理由を吊り下げてもらうことで、来場者の「好き」がひとつの展示空間をつくっていく展示方法を取り、多くの来場者の方に参加していただけました。展示として吊り下げられた来場者のコメントは、学生にとって、自分の建築の新たな良さや面白さに気づくことにつながりました。

本活動は、実際の博物館で展示を作り上げられる非常に貴重な機会であるとともに、普段は交わることが少ない他学年や専門外の人と意見を交わす、非常に刺激的な経験となりました。また、建築分野だけでなく博物館の先生方との展示方法や運営管理の面における関わりからは、多くの学びを得ることができました。

本企画展の一連の活動は最終報告書にまとめ、この成果を活かして、第5回開催に向けて準備を進めていきたいと思っています。



来場者の「好き」で彩られていく第2会場



プロジェクトメンバー

担当学生：

佐藤新太・福嶋花梨・村上陽菜(工学部2年)
秋元優花・新井創太・伊藤琢人・田中美帆・宮村夢音(工学部3年)
金子千裕・石田海都季・伊藤貴洋・奥香奈美・黒田七彩・中野馨文・堀下葵・松下鯉太郎・三上凌平・山田悠介(工学部4年)
高橋陸・茂崎秀祐(工学院修士1年)

担当教員：

小篠隆生(工学研究院)
北野一平・湯浅万紀子(総合博物館)

担当職員：

市来紗都子・土田江里子(総合博物館)

金子千裕
(工学部4年)

博物館実習

●2023年9月5日～8日・11日～14日



農機具に関する展示の改訂を検討する第2農場班

総合博物館での8日間の博物館実習に、学部4年生から博士課程1年生まで専門分野が異なる16名が取り組みました。

午前中中の演習では、坪田敏男館長と研究部教員、越前谷宏紀研究員(資料部)が担当分野の研究と教育、博物館活動について収蔵庫や展示室の案内も含めて説明し、近藤誠司研究員(資料部)と三谷朋弘准教授(農学研究院・資料部)が第2農場を解説・案内しました。事務係の井上猛係長による館運営や事務業務の説明、研究支援推進員の市来紗都子さんと土田江里子さんによるパネル製作実習、展示解説ボランティアの笹谷幸恵さんと渡部典子さんによる解説実演も行われました。

午後は、第2農場、陸上植物、動物、地学の4班に分かれて実習に取り組みました。第2農場班は、モデルバーン2階の農機具の展示の課題を抽出し、説明パネルの内容・表記・デザインの



構内で採集した植物を同定して展示室標本を作製する陸上植物班

観点から来館者の視点に立った展示改訂を行い、農機具の再配置も行いました(指導:近藤研究員・三谷准教授)。

陸上植物班では、大学構内で植物採集を行い、植物体を整形し乾燥させた後に、図鑑や目録、収蔵庫の標本を参照して同定し、作成したラベルとともに台紙に標本を貼付し、データベースに登録する一連の実習を行いました。作製した35科85点の標本は、3階展示エリアのオープン・ハーバリウムに配架しました。他に、外部団体が収蔵庫の標本を活用する様子を実際に見学する機会もありました。(指導:首藤光太郎助教)。

動物班は、昆虫分野では大学構内で昆虫採集を行った後、標本作製の手法を学んだ他、札幌駅構内で市民向けに公開する展示を制作しました。動物分野では、鳥類の解剖を行ってフラットスキン標本と骨格標本を作製し、標本情報をデータベースに登録した他、ホッキョクグマの手形取りも体験しました(指導:大原昌宏教授・江田真毅教授)。

地学班は、岩石・鉱物分野では収蔵庫を見学した後に、岩石・鉱物の鑑定方法を学び、堆積岩・火成岩・変成岩・鉱物の見分け方を説明する一覧表の作成について検討した他、標本データの整理を行い

ました。古生物分野ではレプリカ製作や化石クリーニングを行う化石ボランティアの活動場面や展示室を見学した後、化石をスケッチして観察のポイントを学びました。更に、「北海道の首の短い首長竜・羽幌産プリオサウルス類化石」として2023年6月にプレスリリースされた研究に関する展示制作においては、化石標本を3Dモデリングし、解説パネルを準備し、これらのレイアウトについては展示ケースを3Dモデリングした上で検討を重ね、3階展示室に設置しました(指導:北野一平助教・越前谷研究員)。



鳥類の解剖を行う動物班

最終日には、8日の実習における各班の活動の内容と成果、課題を発表しました。報告会での活発な意見交換や実習生による事後レポートから、16名がそれぞれに博物館の諸活動への理解を実感をもって深めたことがうかがえます。

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)



古生物の部屋(館内3階)に羽幌産プリオサウルス類化石の展示を新設した地学班

2022年度

学生企画ミュージアムグッズ



2種類のポストカードブックと解説シート

北海道大学大学院・理学院の授業「博物館コミュニケーション特論 ミュージアムグッズの開発と評価」では、毎年、学生達による総合博物館オリジナルのミュージアムグッズが企画開発されています。

2022年度の授業で開発されたグッズの第一弾として、2023年5月に、ポストカードや写真、メモを収める「ポストカードブック」(30ポケット)が館内のミュージアムショップぽとろとオンラインショップで販売開始されました。ミュージアムを訪れた際、写真を撮影したり、ショップではポストカードをお買い求めになる方は多いのではないのでしょうか。来館者がミュージアムでの思い出を振り返っていただく際の手立てとしたい、来館者のミュージアム体験をより良いものにしたい、という思いから、2名の大学院生が企画し、表紙は当館と本学の埋蔵文化財調査センターの収蔵標本をモチーフにした2つのデザイン、色もパステルカラーと紺色の2種類を用意しました。



企画した大学院生



博物館の建物と展示物をデザインしたミュージアムマグ

続いて2023年6月に販売開始されたのは、6名の大学院生が企画した「ミュージアムマグ」です。90年以上の歴史をもつ当館の印象的な建物に、本学の水産学部附属練習船おしよろ丸 II 世の舵輪、ニッポノサウルスの全身骨格、ケナガマンモスの原寸模型という3つの展示物がモチーフとしてデザインされたマグは、ほどよいコンパクトなサイズ。建物外壁のスクラッチタイルの風合いが再現され、3つのモチーフとマッチして、珈琲や紅茶の美味しさが引き立つようです。館内のミュージアムフェーバらすのドリンクにも利用されており、このマグが多くの方の日常やミュージアムカフェでのひとときを彩れば、嬉しく思います。

学生企画グッズには全て、担当学生が執筆して、研究者が監修した解説シートが付されています。

2022年度理学院専門科目・大学院共通科目「博物館コミュニケーション特論 ミュージアムグッズの開発と評価」

■学生企画ポストカードブック

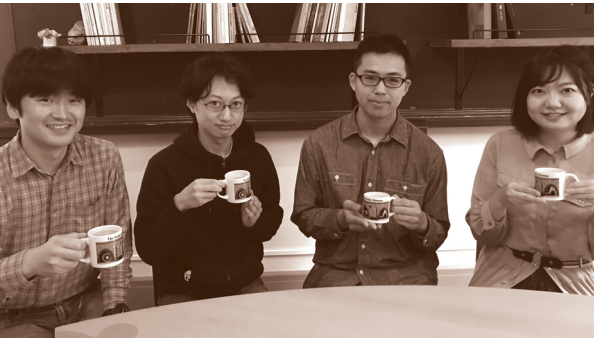
担当学生:岩本歩夢・小木夏海(理学院)
監修:守屋豊人・高倉純(埋蔵文化財調査センター)
阿部剛史・大原昌宏・小林快次・首藤光太郎・田城文人(総合博物館)
協力:北海道大学埋蔵文化財調査センター
指導:北野一平・湯浅万紀子(総合博物館)

■学生企画ミュージアムマグ

担当学生:大村颯・菅原維・薛傲君・橋本彩加・陳心怡(理学院)・陳慧娟(文学院)
デザイン:菅原維
監修:江田真毅・小林快次・田城文人(総合博物館)
指導:北野一平・湯浅万紀子(総合博物館)

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)



担当した大学院生と北野一平先生

学生企画ワークショップ「おえかきミュージアム」を開催

●2023年7月29日・30日



絵本にシールを貼る参加者

本学の大学院の授業「博物館コミュニケーション特論 学生発案型プロジェクトの企画・運営・評価」の受講生20名が「おえかきミュージアム 博物館をめぐるオリジナル絵本を作ろう!」を開催しました。

「夏休みに子どもが楽しめる企画がない」という総合博物館の課題を解消するために、絵本と共に博物館をめぐるワークショップを立案し、参加者に「研究と博物館の関係」について考えていただくことを目指して、学生がオリジナルの絵本やシールを制作しました。絵本はエルムちゃんという少女が博物館の前で「ある物」を探している博士に会い、一緒に館内を探するという物語で、「ケナガマンモス」「CAMUIロケット」「オホーツク文化」「ヤマトタムシ」「北海道石」「ニッポノサルス」の6ヶ所を博士の解説を聞きながらめぐり、最後に「探し物＝ノートと鉛筆」を見つけるという内容です。

参加者は集合場所で絵本を受け取った後、ストーリーにリンクした館内6ヶ所を学生による解説付きで、鉛筆でスケッチをしたり、シールを貼りながらめぐりました。最後は再び集合場所に戻り、学生から実際に使用しているフィールド

ノートについての解説を聞き、フィールドノートのシールを貼ることで自分だけのオリジナル絵本を完成させました。絵本の巻末には、専門分野の教員の監修のもとで学生が執筆した6つの展示物や標本についての解説を掲載しました。

申し込みには先

着順(両日午前・後各10組計40組)としましたが、広報活動が足踏みしたため、集まるかどうか不安でした。しかし、博物館のHPや北大構内のチラシやポスターが役割を果たして事前予約は34組となり、当日の飛び込みは混雑状況をみながら受け付け、結果として40組・130名を超える方に参加いただきました。子どもだけでなく、プロのイラストレータやご夫婦での参加、遠方からの参加もあり、幅広い方に楽しんでいただきました。

展示室では、参加者と解説する学生との間だけでなく、参加者同士のコミュニケーションも見られました。実施後のアンケートでは、「学生の皆さんが専攻以外の分野を担当されても、熱心に調べて勉強されているのがわかりました。子ども向けの企画は多いですが、このように子どもから大人まで楽しく学べるイベントをこれからも実施してほしいです」「学生スタッフの笑顔とやさしさが本当に素敵でした!!その姿に子どもたちが安心し、質問したり自分が創った絵本を見せていて嬉しかったです」といったコメントをいただきました。また、多くの方から本ワークショップを「楽しめた」、絵本の「完成度は高い」、学生ス

タッフの対応は「とても満足」という回答を得られました。さらに初めて来館されたほぼ全ての方から「本企画をきっかけにまた来館したい」との回答を得られました。

驚くべきことは、「今後の学生企画に期待すること」で「また同じ企画をしてほしい」という内容のコメントが多かったことです。完成した「あなただけの絵本」がきっかけとなり、博物館や研究に興味を持ていただくことを目指したこの企画は、当初の博物館の課題を解決しつつ、絵本を通じた学生からのメッセージを伝えられたと感じています。

長峰実央 (理学院 数学専攻 修士2年)

2023年度 理学院・大学院共通授業 「博物館コミュニケーション特論Ⅰ」

担当学生

絵本班：作；小笠原浩平(獣医学院)、絵；矢倉鉄平(理学院)

標本班：マンモス；眞下大和(獣医学院)

CAMUIロケット；栗原史生(総合化学院)、向山立(農学院)

オホーツク文化；古郷優平・野田一成(理学院)

昆虫；岩崎美穂(理学院)、諏訪友葵奈(環境科学院)

北海道石；進藤魁人(農学院)、藤田知之(理学院)

化石；伊藤政矩・多久和隼(理学院)

広報班：池内優季(農学院)、北田翔太郎(国際広報メディア・観光学院)、植田知幸・長峰実央・中山夢斗・吉村駿斗・渡辺隼生(理学院)

教員

標本解説監修：針山孝彦(浜松医科大学医学部)

永田晴紀(工学研究院)

江田真毅・大原昌宏・北野一平・小林快次(総合博物館)

授業指導：湯浅万紀子(総合博物館)



自作のキャプションボードを用いた
学生によるオホーツク文化の解説



ヤマトタムシをスケッチする参加者



フィールドノートの解説(保護者からの質問も!)

博物館における北海道大学初任事務職員実地研修

●2023年8月2日～4日

本学の2023年度初任事務職員27名の人材育成の一環として、総合博物館での実地研修が実施されました。本研修は2017年度から実施しており、2020・2021年度はコロナ禍での博物館休館に伴い実施できませんでした。2022年度に再開されました。初任事務職員が、来館者への本学の歴史と現在についての説明や展示室での案内といった実務体験を通じて、本学への理解と知識をより深め、職員としての意識を高めるとともに、コミュニケーション能力を身に付けることを目指しました。

本研修の受講生は事前に湯浅万紀子教授から博物館の使命や役割、来館者対応についての講義と見学案内を受け、さらに各自が博物館を訪れたり関連資料を調べて予習を重ねた後、数名のグループに分かれて8月2日から4日まで実地研修に臨みました。目標・課題を事前に設定した上で取り組んだ2時間の研修では、来館者へのガイダンスや常設展示の案内、企画展示への誘導などを行いました。設定した目標とその達成度、事前の準備内容、当日の来館者対

応の内容とそこで工夫した点、研修で得られたことや反省点が綴られた研修報告書からは、多くの市民や外国人旅行者を含む来館者が本学と博物館に対して高い関心を持っていることが実感し、来館者との交流の意義を理解したことがうかがえました。

湯浅万紀子

(研究部教授／博物館教育学)



展示室で説明する初任事務職員

『ライマン来道150周年・2023年度「地質の日」記念講演会』開催

●2023年5月27日

「地質の日」記念行事として『ライマン来道150周年・2023年度「地質の日」記念講演会』が博物館1階知の交流ホールにて開催されました。元北海道開拓記念館(現北海道博物館)学芸部長で北海道史研究協議会副会長の関秀志さんを講師にお迎えし、「ライマンと北海道 一日米文化交流の視点から」という題目でご講

演いただきました。定員50名でほぼ満席の中、講演に先立ち、当館ボランティア会長で実行委員会の在田一則さんから、「地質の日」の解説と、講師の関さんの略歴の紹介がありました。「地質の日」は、明治9(1876)年にライマンらによって日本で初めて広域的な地質図、200万分の1「日本蝦夷地質要略之図(にほんえぞちしつ

ようりやくのず)」が作成された日であり、明治11(1878)年に地質の調査を扱う内務省地理局地質課が発足した日として5月10日に制定されました。講演の前半では、明治初期に北海道開拓のために招かれたベンジャミン・スミス・ライマン(1835～1920)の略歴から始まり、地質・地下資源の調査成果や優れた鉱山技術者の育成などの功績について紹介されました。後半では、日米文化交流史の視点で、あまり知られていないライマンの意外な一面(北海道開拓政策に関する指導・助言や、親日家だったライマンの日本での暮らしと日本・日本人観、日本で収集・記録した膨大な日本・北海道関係資料(ライマン・コレクション)と道民も協力したその保存運動など)について、膨大な資料の写真とともに解説していただきました。

北野一平

(研究部助教／岩石鉱物学)



公演前の様子

カルチャーナイト2023開催

●2023年7月21日

市民、企業、行政などがみんなで創る「まちの文化祭」カルチャーナイト2023が開催され、当館は今年も参加しました。当日行われた様々な実施プログラムをプログラム別に紹介します。

カルチャーナイト2023
ポスター



◎北海道石

博物館3階常設展示室「鉱物・岩石標本の世界」では、当館の地学ボランティアにより「新鉱物北海道石（ほっかいどうせき）など展示鉱物標本の蛍光観察会」が開催されました。2023年1月に認定された新鉱物である北海道石をはじめ、北海道石とともに産出するカルパチア石、ピチューメンを含むオパール、そして普段展示しているルビー、方解石（ほうかいせき）、蛍石（ほたるいし）の蛍光する様子を観察しました。展示室の明かりを消して白色LEDライトで通常の見た目を観察した上で紫外線を当てて蛍光させると、鉱物標本の見た目が変化する面白さや神秘さ、蛍光する美しさに歓声が上がりました。160名以上の方々にご来場いただき、鉱物や蛍光について多様なご感想とともに、多くのご質問をいただきました。

北野一平（研究部助教／岩石鉱物学）

◎宇宙の4Dシアター

博物館1階講演室では、宇宙の4Dシアターボランティアによるカルチャーナイト特別プログラム「シン・アマンガワ」公演をはじめ、機器操作体験や簡単な工作が行われました。宇宙の4Dシアターは広大な宇宙に散らばる星々の姿を立体的に映し出し、時空を超えて鑑賞することができます。「シン・アマンガワ」公演では、七夕の物語から始まり、天の川にある星座の紹介、天の川の正体について宇宙の旅をしながら、お子さんにもわかりやすく解説しました。19時と20時から2回公演し、その合間にお子さん向けの紙コップロケットの工作や宇宙旅行のできるmitakaというソフトの操作体験が行われました。たくさんのご来場をいただき大盛況となりました。

北野一平（研究部助教／岩石鉱物学）

◎夜の北大植物観察

昨年度同様、今年度も夜間開花するメマツヨイグサを目的とした植物観察会を実施しました。正面玄関に集合し、大野池とその周辺で夜に花が閉じるスイレンや、系統ごとに夜間花が閉じたり閉じなかったりするキク科植物を観察しつつ、工学部裏のメマツヨイグサに至るルートです。1回あたり約10人を対象に、18時、19時、20時から30分程度の観察会を3回実施しました。昨年は悪天候のため20時からの回をバックヤードツアーに切り替えましたが、今年はすべての回を野外で実施することができ、安心しました。18時からの回はメマツヨイグサの夜間開花がよく観察できないことがわかりましたので、来年度は19時から短い間隔で実施できるよう計画したいと思います。

首藤光太郎（研究部助教／植物体系学）

◎チェンバロ演奏会

昨年に引き続き、カルチャーナイト2023にてチェンバロコンサートを開催いたしました。開演15分前には60枚の整理券を全て配り終えてしまい、急遽、座席数を増やすほどの盛況ぶりでした。

今回のコンサートでは、昨年も演奏してくださった新妻美紀さん（チェンバロボランティア）をはじめ、石川弘晃さん（農学部4年）、葉山朝世さん（文学部3年）、高橋捺津さん（文学部2年）の3名の学生ボランティアも共に演奏いたしました。有名なJ・S・バッハの作品のほかに、J・デュフリやB・ストラーチェといった、生演奏で聴く機会の少ない作曲家の作品も聴いていただきました。チェンバロの優しい音色をお楽しみいただけたと思います。

ご来場くださいました皆様、北大総合博物館関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

森田杜（チェンバロボランティア）

◎夏の星座の展望会

夜間開放だからこその目玉プログラム“夏の星座の観察会”を今年も開催いたしました。開催にあたっては、札幌天文同好会のメンバーを中心とした天体観測愛好家の皆様に多大なるご協力をいただきました。

施設開催を行っている近年の開催日は、スッキリとしない天候が多いのですが、今年は晴天となり、絶好の天体観測日和となりました。

当日は、ご協力いただいた天体観測愛好家の皆様が準備する大きな天体望遠鏡の数々にメインストリートを歩く方々も興味津々で足を止めてくださり、夕暮れになると天体望遠鏡の周りに多くの人だかりができました。

天体観測愛好家の皆様は星座を観ようと集まった皆さんに、普段あまり接する機会が少ない大きな天体望遠鏡を覗かせていただきながらの星座解説や天体に関する素朴な疑問にも答えていただきました。

今年も多くの市民の皆様にお越しいただき、また、天体観測愛好家の皆様にはカルチャーナイトの特別な夜を盛り上げていただきありがとうございました。

来年も星空が観られますように…

井上猛（事務部係長）

【北海道の水草 研究最前線】公開講演会開催

●2023年8月19日

公開講演会「北海道の水草研究最前線」が1階ホール「知の交流」で開催されました。主催は筆者が事務局をつとめる水草研究会で、この日の午後で開催された同会の第45回全国集会研究発表会にあわせて、水草の研究成果や魅力を一般来館者に紹介したいという一心で、筆者と札幌市博物館活動センターの山崎真実学芸員が共同で計画しました。

演者は筆者のほか、株式会社ドーコンの櫻井善文博士、新潟大学大学院自然科学研究科博士課程在学中の内藤芳香さんの3人でした。桜井博士には千歳市美々川で実施された沈水植物に配慮した抽水植物の管理事業についての講演を、内藤さんにはスイレン属の在来種であるヒツジグサとエゾベニヒツジグサの分類や分布についての講演をお願いし（写真）、最後に

筆者が北海道産水生植物の特徴や北海道における最近の研究成果を紹介しました。

水草研究会全国集会への参加者も含め、公開講演会にはほぼ満席となる65名が来場されました。水草研究会全国集会が4年ぶりの対面開催となったことで、久しぶりに顔を合わせることでできた参加者も多かったことから、非常に活発な意見交換が行われたと思います。細かい準備不足はありましたが、大きな問題もなく、盛況のうちに公開講演会を終えることができました。これを機に、国内では最も水辺の多い北海道に生育する水草に興味をもってくれる方が少しでも増えることを期待します。

首藤光太郎
（研究部助教／植物体系学）



講演を行う内藤芳香さん（新潟大学大学院自然科学研究科）

ボランティア表彰

●2023年3月15日

総合博物館では、活動継続5年、10年の節目を迎えられた方を対象とした表彰式を毎年執り行い、博物館活動に協力いただいたことへの感謝の意をお伝えしています。

現在は総合博物館16分野と水産科学館のボランティアグループが活動しています。

2022年度は、活動継続5年を迎えられた方が12名、10年を迎えられた方が5名いらっしゃり、表彰式には5名の方がお越しくされました。表彰式は、湯浅万紀子教授に進行いただき、小澤丈夫館長からおひとりおひとりに直接感謝状

が手渡され、当日ご欠席の表彰者の方々には後日感謝状をお送りしました。

今回表彰を受けられた方々を含め、ボランティア活動継続者のお名前は、博物館3階廊下に掲示しております。ご来館の際には是非ご覧ください。

当館の活動にご協力いただいている事を改めて感謝申し上げます。

山田久恵
（事務部主任）



重要文化財 「札幌農学校第2農場」 屋内公開再開

重要文化財「札幌農学校第2農場」屋内一般公開を再開しました。夏期間のみ公開のため、2023年度の公開は11月3日で終了しております。なお、屋外（建物外観や前庭）は従来通り通年公開しています。

◎公開時間◎
（屋外・通年）8時30分～17時
（屋内・夏期間のみ）10時～16時
◎休館日◎
毎月第4月曜日、12月28日～1月4日
◎入場料◎
無料

「北海道大学総合博物館がやってきた！JRタワー・エゾミュージアム」開催

●2023年9月16日～9月24日

札幌駅JRタワー1F東コンコースにおいて当博物館が出張展示を開催いたしました。

展示内容は、当館の収蔵標本のうち北海道にまつわる動物はく製、昆虫、岩石鉱石など多様な標本を紹介、また、標本の掲示だけでなく、パネルやそこにまつわる研究資料(標本ができるまで等)も展示し、学術的な側面からのアプローチも紹介いたしました。

JR札幌駅東口改札口を出てすぐのコンコースで開催したため、人通りも途絶えることがなく、家族連れや観光の皆様はもちろんですが、仕事や学校からの帰宅途中の方々も足を止めていただき、剥製の写真撮影や昆虫の標本を興味津々にのぞき込むなど、多くの皆様にご覧いただきました。特に最近話題の「北海道石」の展示

には関心を寄せていただき、ブラックライトを当てて光る様子をご覧いただきました。

また、展示に併せて「北海道の生き物」ステッカーをプレゼントするクイズコーナーを設置したところ、家族連れ・子供たちだけでなく観光の皆様にも多数参加いただけました。

観覧いただいた方からは「駅内でアクセスが良く人通りが多い場所で、イベントを開催していることが有難い。またそれが、勉強になるコンテンツであることも有益で有難い。」との感想をいただきました。また、開催期間中には当館には「JRタワーの展示を見て博物館に興味を持ったので来てみました。」とおっしゃる方々が多く来館されました。

出張展示の開催期間は9日間ですが、延べ

45,000人ほど来場されました。多くの皆様にご観覧いただきありがとうございました。これから総合博物館の魅力を広く知っていただくために、このような機会があれば積極的に関わっていきたいと思います。

なお、公開に合わせまして、今回の企画に携わったSTV札幌テレビ放送の情報番組内でこの展示イベントの紹介、期間内にイベントのテレビCMが放送されました。

(主催:札幌駅総合開発(株) 共催:北海道大学総合博物館 企画:STV札幌テレビ放送)

井上猛
(事務部係長)



パネルを見ながら子供さんに説明するお父さん



はく製の写真を撮るお客さん



昆虫の標本を見る家族



ブラックライトをあてた北海道石を見る子供さん

2023年度
前期記録

令和5年4月から令和5年9月までに行われた
バラタクソノミスト養成講座

昆虫バラタクソノミスト養成講座 (初級)
大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)
山本 周平(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:7月8日～7月9日 定員:12名 対象:中学生以上
参加者:9名

岩石バラタクソノミスト養成講座 (初級)
竹下 徹(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:7月15日
定員:15名 対象:高校生以上
参加者:13名

考古バラタクソノミスト養成講座 (初級)
小野 裕子(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:8月6日
定員:10名 対象:一般
参加者:8名

植物バラタクソノミスト養成講座 (初級)
首藤 光太郎(北海道大学総合博物館 助教)
日時:9月16日、17日
定員:両日各12名 対象:中学生以上
参加者:9月16日10名、9月17日12名

令和5年4月から令和5年9月までに行われた
セミナー・シンポジウム

バイオメテイクス市民セミナー
『地域学:歴史に学び風土が拓く、持続可能な未来』
～産業史から読み解く生態系サービスと自然共生～
武田 正哉(苫小牧市教育委員会 学芸員)
井手淳一郎(公立千歳科学技術大学 准教授)
関井栄二(元千歳市職員)
日時:4月8日(土)13:30～15:30
参加者:24名

土曜市民セミナー「ニワトリ?ガチョウ?世界最古の家禽を動物考古学から探る」
江田 真毅(北海道大学総合博物館 教授)
日時:4月15日(土)13:30～15:00
参加者:50名

土曜市民セミナー「博物館収蔵海藻標本の利用」
阿部 剛史(北海道大学総合博物館 准教授)
日時:5月11日(土)13:30～15:00
参加者:28名

土曜市民セミナー「未来へと紡ぐミュージアム体験の記憶 ライフストーリーの観点から体験を意味づける」
湯浅 万紀子(北海道大学総合博物館 教授)
日時:6月10日(土)13:30～15:00
参加者:8名(事前申込制)

土曜市民セミナー「2023夏季企画展の楽しみ方 札幌農学校付属農場と小岩井農場農場施設」
小澤 丈夫(北海道大学工学研究院 教授)
角 哲(名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 准教授)
日時:7月22日(土)13:30～15:00
参加者:20名

土曜市民セミナー「コロナ禍の3年で逆にできるようになった(?)北海道内の植物研究」
首藤 光太郎(北海道大学総合博物館 助教)
日時:8月12日(土)13:30～15:00
参加者:30名

土曜市民セミナー「コロナ渦と戦争 魚類分類屋の苦悩、そして新たな取り組み」
田城 文人(北海道大学総合博物館 助教)
日時:9月9日(土)13:30～15:00
参加者:15名

令和5年4月から令和5年9月までの
主な出来事

4月1日	坪田敏男 館長 着任 研究支援推進員 土田江里子さん 着任
4月28日	文部科学省高等教育局国立大学法人支援課 大江企画官 博物館見学
5月11日	リトアニア国立博物館ご一行(4名) 博物館見学
5月14日	ポブラチェンバロミュージアムコンサート「ポブラのプレリウド」
5月25日	ダクタリ動物病院 加藤元総合院長(他2名) 博物館見学
5月26日	ボランティアの会総会・講演会
5月27日	『ライマン来道150周年・2023年度「地質の日」記念講演会』
5月30日	新鉱物「北海道石」期間限定展示(～9/3)
6月1日	事務補助員 高橋千華子さん 着任
6月6日	北京科技大学副学長(他3名) 博物館見学
6月22日	学術交流会館にて第26回大学博物館等協議会・第18回日本博物科学会開催(～6/23)
7月21日	カルチャーナイト2023
7月22日	夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景」(～9/10)
7月29日	学生企画「おえかきミュージアム」(～7/30)
8月19日	【北海道の水草 研究最前線】公開講演会
9月16日	札幌駅JRタワー1F東コンコースにて「北海道大学総合博物館がやってきた!JRタワー・エゾミュージアム」開催(～9/24)
9月29日	金曜ナイトミュージアムチェロコンサート
9月30日	第4回建築の学生展(～10/1)

入館者数(令和5年4月～令和5年9月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
4月	12,282	休止	休止	
5月	15,862	16	休止	『ライマン来道150周年・2023年度「地質の日」記念講演会』(5/27)
6月	21,924	41	休止	
7月	19,616	46	休止	カルチャーナイト2023星空とチェンバロの夕べ(7/21) 夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景」(7/22～9/10) 2023学生企画「おえかきミュージアム」(7/29～7/30)
8月	30,985	19	休止	夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景」(7/22～9/10) 【北海道の水草 研究最前線】公開講演会(8/19)
9月	17,891	24	休止	夏季企画展「近代農業がみた夢－札幌農学校第二農場と小岩井農場がつくる風景」(7/22～9/10) 「北海道大学総合博物館がやってきた!JRタワー・エゾミュージアム」(9/16～9/24) 第4回建築の学生展(9/30～10/1)

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。(令和5年4月1日～令和5年9月30日)

(敬称略)

●植物標本

井河龍之介, 石川浩晃, 蝦名順子, 大原和広, 奥山修右, 小野波龍, 加藤 恵, 加藤康子, 菊地敦司, 木下愛子, 児玉 諭, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 田端邦子, 中川博之, 中里清孝, 西村南美, 新田紀敏, 萩原法子, 林 裕子, 藤田 玲, 星野フサ, 道川富美子, 目黒嘉子, 矢野ひろ, 山本ひとみ, 横山 耕, 吉中弘介

●菌類標本

石田多香子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

梅田邦子, 柏崎 昭, 喜多尾利枝子, 黒田 哲, 紺野鼓太郎, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐々木柊太郎, 佐藤國男, 澤田昌恭, 志津木眞理子, 諏訪正明, 高橋かなみ, 高橋誠一, 津島光大郎, 都筑暖和, 問田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 藤田淳一, 古田未央, 村上麻季, 山本文子, 山本そら, 山本ひとみ, LIEW HAI XIANG

●考古学

荒井綺乃, 池田圭吾, 猪沢未来, 今井菜摘, 内田耕平, 宇津城遥平, 太田 晶, 大泰司紀之, 大藪隼平, 奥山杏南, 勝島日向子, 木村則子, 許開軒, 工藤智美, 越崎聖也, 斉藤理恵子, 佐々木征一, 佐藤亜希子, 佐藤桐子, 謝 倩冰, 相馬司, 染矢楓久, 高橋由羽, 多久和隼, 田中望羽, 陳 姿螢, 坪内 和, 土肥加奈子, 中山小夏, 西山 貢, 二瓶寿信, 丹羽志萌, 原山法大, 平山 薫, 星山葵衣, 堀 隼輔, 前田大智, 安井優実, 吉沼利晃, 渡邊洋子

●メディア

矢野ひろ, 山田大隆, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 市橋晃弥, 糸井容子, 白田みゆき, 大島康生, 太田 晶, 太田久美子, 大村 颯, 大藪隼平, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 木村聖子, 木村映陽, 小林将貴, 近藤知子, 櫻井奎志郎, 佐藤健一, 武田満希, 田中望羽, 千葉謙太郎, 長瀬のぞみ, 西川香々, 本村美奈子, 前田大智, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子

●北大の歴史展示

西東 淳, 高橋道子, 土井茂子, 藤田正一

●展示解説

在田一則, 池田玲菜, 太田 晶, 生越昭裕, 角井美月, 河本恵子, 西東 淳, 笹谷幸恵, 千葉謙太郎, 塚田則生, トン タイン ミン, 永岡明美, 西川笙子, 廣瀬由香里, 松田義章, 村上龍子, 山崎敏晴, 山田大隆, 渡部典子

●平成遠友夜学校

柿本恵美, 城下洽子, 須田 力, 高橋道子, 土井茂子, 藤田正一, 牧野小枝子, 増田文子, 山岸博子

●4Dシアター

安部布実子, 石神早希, 岩本歩夢, 長田幸子, 加藤啓子, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 清水花梨, 田中裕子, 成川航斗, 長谷川健太, 平井由実果, 平田栄夫, 福澄孝博, 増田文子

●ポプラチェンバロ

石川恵子, 石川弘晃, 小野敏史, 新林俊哉, 高橋捺津, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 森田 杜

●図書

岡西滋子, 今野成捷, 嶋野月江, 須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 久末進一, 鮎田久意, 本名百合子, 村上龍子, 山田大隆

●第2農場

石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 岡川秀幸, 金子哲郎, 西東 淳, 城下洽子, 花里隆, 藤井利侑, 山田大隆, 渡部典子

●ハンズオン

嶋野月江, 須藤和子, 仲谷優輝, 濱市宗一, 福澄孝博, 山岸博子

●きたみてガーデン

石川弘晃, 浦里拓人, 新免友基

●地学

安部布実子, 在田一則, 浦口弘子, 加藤義典, 黒沢邦彦, 小磯直也, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 清水花梨, 高橋政哉, 辻野淳子, 都筑暖和, 成川航斗, 新井田清信, 西川香々, 廣瀬由香里, 福澄孝博, 間口久美子, 増田文子, 松田義章, 皆川泰輝, 山崎敏晴

●水産科学館

Lee Jungho, 井黒浩輔, 伊藤和希, 小幡光汰, 北向祐人, 篠原知樹, 園山萌香, 張 逸帆, 二瓶聡, 瀧田幸穂, 檜垣健介, 樋口淳也, 古庄 誠, 松本 堅, 山下花梨, 山梨颯太, 横川健太